

〈学びの教室コラム〉「学び・遊び・つなぐ」プロジェクト

「いつでも・どこでも・だれとでも」

～笑顔×あいさつから始まるコミュニケーション～

大部 由美

1 はじめに

この度、鳥取大学より「教員を目指す学生や今後社会で働く学生に対し、これまでの経験を話してほしい」と依頼をいただき、私自身、大学生の前で話しをしたことはないが、「声をかけていただけるうちが花」と思い、話をさせていただいた。

コロナ禍が明けたかと思ったらインフルエンザの蔓延でマスクが手放せなくなり、「この人の素顔はいつから見ていないだろうか?」「マスク顔しか見ていないこの人は、どんな顔をしているのだろうか?」と思え続けたこの4年間。そんな中、知り合いから「笑顔でいると良いことがあるよ」と言われ、笑顔で過ごすことを意識したらイライラすることが減り、自分の周りの人達も笑顔が多くなっていった。コロナ禍中に東京オリンピックを経験し、そこでも笑顔で過ごすことの重要性を海外の選手から気づかされ、「笑顔は万国共通だ!」と実感した。そして笑顔は自分を大切にすることに繋がることを実感した。このコラムでは、笑顔を大切にすることが自分を大切にすることに繋がる事を伝えたい。

2 反骨心が支えた選手時代

私がサッカーを始めたのは小学4年生の時(昭和59年)。昭和60年のわかとり国体(鳥取)開催に向けた準備のため、ほとんどの競技が学校の先生で構成され、その先生方から陸上や水泳、サッカーを教わった。当時、サッカーは男の子のスポーツと言われたが、私が通っていた境港市立渡小学校はサッカー関係の先生が多くいたこともあり、男女関係なく全員がサッカーを楽しんでいた。

私は小さい頃から大の負けず嫌いで、ジャンケンも負けたくない、男女関係なく走ることだって負けたくないと思っていた。サッカーも「なんで女の子がサッカーをしちゃいけないの?!」と反発しながら楽しく競い合っていたことを覚えている。その負けず嫌いは大人になっても続き、マークをする相手(敵)、対戦チームはもちろん、女子サッカーを排除しようとする世の中の流れにも対抗心を燃やし、バブルが崩壊して不景気が続く中で所属するチームが相次いで廃部になっても、「負けるもんか!」と反骨心の塊で、所属チームと日本代表チームで闘ってきた。

現役時代は「鬼軍曹」と呼ばれ、自分にも仲間にも厳しく要求し妥協を許さない選手で、笑顔でサッカーをした記憶はほとんどないに等しい。今思えば、その時に笑顔が大切だと知っていれば、苦しい中でも楽しく寛容な心でサッカーが出来たかもしれないと思うが、時代がそうではなかったとも言える。現役時代、とても苦しい環境と状況の中でサッカーをしていたこともあり、サッカー指導者には絶対になるものかと誓い、2007年に現役を引退した。

3 私の心を動かした子ども達

現役引退後は、心と身体のケアをしながら第二の人生を考えようと地元鳥取に帰った。その直後、小さい頃からお世話になっている地元の方から「渡小学校の学童の指導員をやってくれないか？」と頼まれ、地元への恩返しを考えていたところだったので直ぐに了承の返事をし、学童の指導員になった。そこで会った子ども達は、「こんにちは」とこちらがあいさつしても無反応。保護者の方が向かえに来られた際に、「お疲れ様です」と声をかけても無反応。この反応に私はショックを受け、日本の未来が危ないと思い、これを何とかするには自分がこれまでサッカーで培ってきた経験を伝えていきたいと思うようになった。「サッカー指導者には絶対にならない」という誓いを引退後1年で撤回し、指導者の道を歩み出した。

4 いつでも・どこでも・だれとでも

指導者になって16年が経とうとしているが、これまで携わった選手全員に「いつでも・どこでも・だれとでも」サッカーが出来るようになって欲しいと伝えてきた。それは日本代表選手だろうが、スクール生の幼児だろうが関係ない。なかなか難しい事だが、自らあいさつし、自分の意見を恥ずかしがらずに伝えれば、国内外で受け入れてもらえる事、助けてもらえる事を私自身が実際に経験してきたからだ。「あうんの呼吸」や「人の気持ちを察する」ことは、私自身とても好きな日本の文化ではあるが、それを更に活かすためには「言語・母語」をしっかりと身につけて「私は」としっかり主語を持ち、自分の考えを相手に伝えることが大切だと考えている。「うちの子は将来、日本代表選手になれる可能性はありますか？」「うちの子はセンスがありますか？」と良く聞かれるが、それは誰にも分からない事である。私からアドバイスできることは、「ヤバイ・普通・微妙・無理」などの曖昧な言葉を、本人はもちろん関わる大人も使わず、具体的な言葉を用いて他者と笑顔でコミュニケーションを取っていけば、生きる力が身に付き、可能性が広がると思うという事だけである。要は「自立・自律」することが大切なのだ。

5 おわりに

「私はもう鳥取には戻らないだろうな」と飛び出した16歳の春。しかし32歳の春、第二の人生を探しに鳥取に戻ってきた。そこで地元の子ども達から「チャンス」をもらい指導者の道を歩んでいる。選手として17年間、指導者として16年間、サッカーを通して様々な国で闘い多くの人達と出会い、貴重な経験をさせていただいた。サッカーはチームスポーツと言われるが、私は個人競技だと思っている。こう言うと周りの人はキョトンとした顔をするが、説明をすると「なるほど！」と思われる方も少なくない。コロナ禍を経験し笑顔の重要性を今まで以上に感じたのと同時に「個（自立・自律）」の重要性も感じている。一人一人が笑顔を大切にしていれば自分の機嫌（ポジティブ）をとることができ、自然と周りの人達も笑顔になっていく。ポジティブな「個」は自ずとポジティブな「個」と導き合い、ポジティブな連鎖を作り出す（グループ・チーム）。これからも私自身が笑顔であいさつすることを続け、ポジティブな連鎖のきっかけを作っていきたい。そして、周りの方々と共にポジティブなグループ・チームを創り、豊かな地域作りをしていきたいと思う。

大部 由美（翔英学園はぐくむセンター長）